

その 33

『万葉幻視考』考（その 2）



天皇、宇智の野に遊^み獵する時に、中皇命、間人連老に献^{はし}らしむる歌

「やすみしし 我が大君の 朝には 取り撫でたまひ 夕には い寄り立たしし みとらしの 梓の弓の
中弭の ^な音すなり 朝狩に 今立たすらし 夕狩に 今立たすらし みとらしの 梓の弓の 中弭の ^な音
すなり」

（やすみししわが大君が、朝には手に取って撫でられ、夕べには、そのそばに寄り立っていらしたご愛用の梓の弓の中弭の音が聞こえます。朝狩に、今お発ちになるらしい。夕狩に、今お発ちになるらしい。ご愛用の梓の弓の中弭の音が聞こえます）
中皇命（卷 1・3）

「たまきはる 宇智の大野に 馬並^なめて 朝踏ますらむ その草深野」

（宇智の大野に馬を並べて、この朝踏み立てていられるであろう。その草深い野よ）

中皇命（卷 1・4）

これまで 2 回にわたって、異色の万葉学者大浜巖比古氏の『万葉幻視考』を読んできた。引き続き、後半部分を読み進めることにするが、「あまりにも詩人の魂を持ちすぎた万葉学者」大浜氏の詩人的直感と学術的論証は多岐にわたっているので、その中から、次の 3 つの論点に絞って見ていくこととする。

- (1) 「大伴家持が因幡で最後に詠んだ正月の賀歌を、どう読むか？」
- (2) 「誰が、万葉集を編集したのか？ その始まりは？」
- (3) 「私は誰でしょう？ 謎の中皇命は一体誰なのか？」

(1) 「大伴家持が因幡で最後に詠んだ正月の賀歌を、どう読むか？」から始めることにする。

『万葉幻視考』の冒頭、大浜氏は、『万葉集』とは、まずは「鎮魂の書」である、として、鎮魂にはタマフリとタマシズメがあると、次のように書いている。

くともかく鎮魂にはタマフリとタマシズメがあり、タマフリを正の鎮魂とすれば、タマシズメを負の鎮魂と言えようが、1 つの歌でもって、ある対象に対して正の鎮魂をする時、それがそのままう 1 つの対象に対して負の鎮

魂をする場合があり、またその反対の場合もあり、また1つの歌が1つの対象に対して正負いずれにもはたらき、結果的に正、或いは負の鎮魂を為す場合もあり、ことはまた複雑で、その正負混淆の鎮魂を解きほぐさなければならない場合がある> (P33)

「^{あらた}新しき 年の始めの 初春の 今日降る雪の いや重け吉事」と歌った「万葉集」最後の歌は、言うまでもなく、因幡守大伴家持が、宝字 3(759)年正月 1 日因幡の国庁で国郡の司等との宴の席で詠った歌である。万葉集最終歌であり、家持にとっても最後の歌となったこの歌は、文字通り、「正負混淆の鎮魂」の歌となった。大浜氏は、その「正負混淆の鎮魂」を次のように、解きほぐしている。

当時権勢を誇った藤原仲麻呂により左遷された因幡の最初の正月、この歌を詠った家持は、その後、
くその運命の起伏につれて、あるいは一喜し、あるいは一憂する間に、いくたびかその姿勢のゆらぎがあるのだが、(略) 以後われわれは彼の歌に接し得ない。彼はついに歌の呪力に絶望したのであろうか。歌にかけた祈りの挫折であったのであろうか。

宝字 6 年(762)の正月、信部大輔として帰京した家持は、都の状況の変化の中に仲麻呂の頹勢を見、因幡守として体よく自分を鄙に迫いやった元凶の姿を見るのだが、その時、自分の歌の呪力をまとも信じ始めたのであろうか。その歌に護られていると信じたからこそ、この優柔不断のそりを免れ得ない家持も、ついに藤原良継らの仲麻呂打倒の謀議に参加し得たのであろうか。ことは密告されて、これはまた因幡よりもさらに遥かな鄙、薩摩へ、名は守とはいえ、またしても体のいい配流の身となったではないか。この時の彼の歌に対する挫折の思い、その怨念は、どんなものであったのであろうか。

このことはむしろ次の如くに考えた方がより真実に近づくのではないのであろうか。それは、家持の心の中での、歌の呪力の、陰湿な変質である。即ち、当時の風潮から見て、歌の呪力は、ひそかに呪誼の力の方へ傾いていったのではないかという推測である> (P115)

く(薩摩への配流は) 仲麻呂(恵美押勝)がその頹勢挽回のためにうった手の1つであることはあまりにも明らかであったからである。むしろ裏に秘めた怨念の呪誼が、次々と状況を変えつつあると思ったのではなかろうか。かくしてもはやたばかることなく、仲麻呂打倒の謀議に参加(した)のだが、またしても敗れてしまう。さい果ての薩摩で、いくら人のいい家持だとしても、いままでの如く、歌がうたえる筈がないではないか。もし歌が口にのぼるとすれば、それはいちど呪誼に沈んでしまった、あの悲しい寿歌であろう。そして、それは効を奏した。仲麻呂はついに斬られた。> (P118)

藤原仲麻呂の乱(764年)である。天皇から恵美押勝の名を賜り最高権力者として思いのままに振舞った仲麻呂も、後見した光明皇太后が死去したことでさしもの権勢も陰りを見せることになる。そこで、再び政権を奪取しようと反乱を起こすが失敗、仲麻呂は惨殺され、一家皆殺しとなった。この仲麻呂の乱の鎮圧に功績のあった、志貴皇子の子、白壁王がその後光仁天皇として宝亀元(770)年即位する。その子山部皇子は後に平安京に遷都する桓武天皇である。志貴皇子は、言うまでもないが、「石ばしる 垂水の上の さわらびの」の歌で知られる万葉を代表する歌人で、大浜氏は、志貴皇子も「誇り高い敗者」の1人に位置付けている。そして、続けて書く。

く光仁父子は、この時はじめて、からみつ藤原の手から解き放たれた。そして家持も、宝亀 11(780)年、はじめて参議として枢機に参じ、右大弁となるのであった。天平 3 年 (731) 父旅人没してより、ちょうど 50 年目、思えば家持にとって、長い沈淪と流離の果てであった。

この日の当る場所に出て、都の空を晴れがましく仰ぐ時、家持はまさに清爽の気を覚えたことであろう。かつて吟きつづけた宝字 3 年の歌は、やはり呪詛の歌ではなく、まさに家持にとってこの上ない幸せをもたらした大伴一族への賀歌となって、家持の胸にキラキラしくよみがえって来たのである。「いや重け吉事！」の「ことだま」は、かくて、古代の呪力のいぶきをふきかえし、「言霊のたすく国」の实在を彼は確認したことであろう>

(P119)

(2) 「誰が、万葉集を編集したのか？ その始まりは？」

この新説の論証については長くなることもあり、坂本氏が、「解説」でコンパクトにまとめてくれているので、それを引用させてもらおう。

く家持の賀歌についての考察は、(略) 一旦は呪詛に沈みはしたが、再び呪歌として取り戻し、大伴復興の正の鎮魂歌として自覚したと述べており、前に『万葉』の本質について「めざす世界は清明」であると述べたことと矛盾は来たしていない。天平宝字 3 年の正月賀歌 (巻 20・4516 番) に家持の呪詛の思いを読み取ることは、なお問題が残ろうが、『万葉集』がこの因幡国庁の賀歌を最後としていることの謎への理解は、著者(大浜)の考察によって一段と進むことは間違いない。

家持がその因幡国庁の賀歌を、大伴復興の正の鎮魂歌と自覚し、光仁天皇への正の鎮魂歌として献じようとする心を抱き、市原王の編んだ『歌林』と家持の「歌日記」とを合わせて光仁父子への鎮魂歌集を編むことを 2 人で語り合ったことから、現『万葉』が勅撰集としての道を歩みはじめる。とするこの章最後の説は、『万葉』編纂にかかわる極めて重要な見解である。『万葉集』の編纂を、「ならの御時」「平城天子」の詔によるものとする『古今集』序の説や、「高野の女帝の御代天平勝宝 5 年」に「左大臣橘卿諸卿大夫等」が撰んだとする『栄華物語』の説等との関連も更に考えてゆかねばならない問題であるが、こういった点についてどのような見解を抱いていたのか今は聞く術もないのが残念である> (P308～309)

「市原王の編んだ『歌林』とあるのは、大浜氏が、志貴皇子の曾孫で歌人の市原王のもとにあった 7 巻の歌集「歌林」は、市原王が編纂した志貴皇子一門の家集と見たことから、市原王と家持とが語り合っ、『万葉集』勅撰の道を歩み始めたとしている。

坂本氏が、「平城天子」と「左大臣橘諸兄卿」の説等との関連も更に考えてゆかねばならない、と指摘しているように、万葉集を編纂したのは誰かについては諸説ある。大浜説とは別に、私がこれまでに「幻視」した「万葉集ができるまで」を、万葉ファンタジア「万世集から万葉集へ」として脚本化し、次回紹介したい。

(3) 「私は誰でしょう？ 謎の中皇命は一体誰なのか？」

まずは、大浜氏が解いた答から明らかにしよう。謎の中皇命は、万葉集を代表するスーパーstar、額田王である、と大浜氏は書く。

なかのすめらみこと

「中皇命」……その名前を覚えておられるだろうか。本稿の（その 8）で取り上げた、万葉集の巻頭に当たる巻 1・3 番と 4 番の 2 首の歌の作者である。本稿の冒頭に、その 2 首を再掲しているのでご覧いただきたい。（『万葉幻視考』を紹介したおかげで、重要な万葉集巻頭の 1 番歌から 4 番歌まで、見ることができた）。

「日めくり万葉集」放送当時の美智子皇后（現上皇后）が万葉集の中で一番好きな歌の 1 つに上げられたもので、皇后が天皇を慕う歌である。この歌を聞き出してくれた女優檀ふみさんは、この時の美智子さまの言葉を覚えていた。「とてもきれいでしょ。中皇命の歌なの。なんだか男の人の名前みたいけど」。

この時は、この男の人の名前みたいな「中皇命が、誰なのか定説はないが、孝徳天皇の皇后説が有力だ」と書いた。中西進編『万葉集事典』を見ると、「準天皇の意で中天皇ともいう。間人皇女（孝徳天皇の皇后）説、斉明天皇、倭姫太后説、皇后説等がある」となっていて定説は見ない。その中皇命が、「額田王なり」、という大浜氏の仮説は、いかにも大胆で、確かに面白い。美智子上皇后が、それを聞いたら、さぞかし驚き喜ばれることだろう。

さて、きわめて大胆にして興味深いこの論証に入る前に、実はこの論にはいささか問題があるので、あらかじめそれに触れておく。この本の解説にあたった坂本氏は、その「解説」で、次のように指摘している。「額田王が中皇命であるとの新説が出されているが、これはどうであろうか。着想の面白さは認められるにしても、（略）簡単には首肯しがたいところである」。その論拠は後ほどということにして、この「面白い着想の新説」について、大浜氏の論証をたどってみることにしよう。

大浜氏は、まず、「越えなければならない最大の難問」としているのが、この「中皇命の謎」であるとして、万葉集の関連で出てくるのは珍しいモナ・リザの名を挙げて、次のように言う。

＜中皇命——それはわたくしの 30 年に及ぶ『万葉』探求のなかで、謎のほほえみで問いかける『万葉』のモナ・リザであった。「わたしは誰でしょう」。その歌に接するたびにその問いかけはつづいた＞（P240）

以下、大浜氏の論証を、かなり大雑把にならざるを得ないが、ポイントとなる部分をピックアップしてみる。

＜これら古代的魅惑にみちた歌の作者について、それを明らかにすることに、実は絶望していたのである。勿論、今は亡き師、沢瀉久孝の名著『万葉歌人の誕生』に収録するところの「斉明天皇の御製」をはじめとして、幾多先学の論考にも接したが、ついにわたくしは納得することができなかった。

しかし今やその謎を解かねばならない。そしてわたくしは解いた。解いたと思う。（略）

中皇命、その訓みは、ナカツメラミコトでよい。けれどもそれは従来の中天皇、中宮天皇の意味ではない。ナカは天皇と皇后との間の意味である。スメラは天皇、皇后と表記される場合の倭語、最高尊貴の人の尊称スメラである。ミコトはもちろんミコトモチの略である。ナカツメラミコトモチ、すなわち、天皇（最高政権者）と皇后（最高教権者、即ち最高巫女）の間であって、そのコミュニケーション、ミコトの伝達者である。だからこのコミュニケーションは、たんなる意志伝達ではない、ミコトのコトダマのなす、タマのかよいなのである。

元来、古代にあっては、天皇も皇后もいずれも強烈なタマの保持者であった。この強烈なタマとタマとの緩衝にナカツスメラミコモチが必要であったのであろう。従ってこのミコモチは歌によって為されたと思う。歌の語源と思われるものがそれを暗示しているように思う。

ワタの転ウタであるとする説に従えば、ワタ（渡すの語基）（曲—婉曲）、ウタ（打つの未然形）（訴うの語基）（移すの語基）などが考えられる。

すなわち、この強烈なタマを相手にウツす場合、或いはワタす場合、ある時はワタ（婉曲にやわらかく）に、ある時は相手よりさらに強烈にウタ（打）ねばならず、またウツたえねばならないからである。

ナカツスメラミコモチが、そういうものであるからには、天皇が教権と政権を併せもっている時は不要であるが、皇后が教権をもった場合に於いては、その存在が要求されたものであろう>（P241～242）

<男帝と皇后の時にのみ中皇命が存在するのは、女帝の時には、天皇が女性であるから、政権・教権ともに同一人が持つことになり、中皇命はその存在の意義を失い、その呼称は役わりと共に消えて、額田王の実名があらわれてくるのではないかという考えを導き出してくれたのであった>（P245）

つまり、天皇と皇后の間には、中皇命という名前のコミュニケーター、伝達者が存在して、その役を額田王が勤めており、女帝の代になるとコミュニケーターが不要となり、額田王の実名が出てくる。すなわち、中皇命と額田王は同一人物であるというのである。そして、額田王は幼少の時からそのために育てられ教育されてきたとしている。

<天皇と相並んで、国の教権をつかさどる最高巫女皇后になり代って天皇に対してのみミコモチする高貴な巫女は、ある特定の家柄の者であったと考えられる。鏡王家はそういう家柄であったのであろう。そこに生まれた額田王は、清らかな童女巫女として宮中に召しあげられ、その教育者として共に従って来た間人連老によって、幼少にしてそれにふさわしい教育を施されたと思うのである。皇極即位とともに中皇命はもとの額田王に戻る。しかし女帝のもとで、こんどは、教権、政権あわせ持つ女帝の、教権に関する方での役わりの一部を受けつものとして、そのまま宮廷にとどまったことであろう。役わりというのは、宮中で歌が必要とされるとき、その歌の作詞者乃至朗唱者——いわば後のいわゆる宮廷歌人のごときものであったであろうか。この場合も、女帝の代作者たり得る、高貴な巫女性と豊かな創造性が要求されるからである。

中皇命の役わりを解かれて、皇極の後宮に残った額田王は、美貌益々輝き、その才を発揮する匂うが如きおとめとなっていた筈である>（P247）

この大浜氏の大胆な新説に対して、坂本氏は、次のように解説する。

<著想の面白さは認められるとしても、スメラミコモチなら何故間人連老に献ぜしめたのか、また、元明天皇を中都天皇といったことをどう考えるか、の見解も示されていないし、簡単には首肯しがたいところである。この説には、著者自身後に不安を感じていたようであり、健在であったならば、自ら再考すべきところであったと思われる>（P311）

確かに指摘の通りであろうが、坂本氏も、「着想の面白さは認められる」という通り、着想や発想の斬新さ、豊かさは、なんとも見事である。いずれにしても、大浜氏自身、「改めて書く」と言った「額田王論」が書かれることなく亡くなられたのは誠に残念なことであった。

そして、「遺弟」坂本氏は、「解説」の最後で、こう書いている。

く先生の逝去により、結局この書は未完のままとなった。今となっては本書がどういう完結をとるものであったかを知る術はない。書齋に残されていた 2 冊のノートにも、その断片すら覗き知ることができぬ。しかし、この論は、あと 1 回の『すばる』連載で完結するはずであった。病に倒れてもずいぶんとそのことが気にかかっておられて、本書は、昭和 51 年 8 月、病気を気遣った梅原猛氏から、完結の章が書けぬままでも単行本にして一旦上梓したらどうか、との勧めをいただいたこともあったが、何とか小康を得て完結させて出したい、という本人の強い希望で、刊行を見合わせたいきさつがあった。糖尿病で目が不自由になられたため、読むべき論文をテープに我々が吹き込み、先生は手さぐりで文字を書く練習をなさるなど、懸命の努力をしたのであったが、今は空しい。論じ残されたことは多い> (P313)

大浜氏と、旧制広島高等学校で中島光風教授に、ともに万葉集を師事して以来 40 年にわたる友人である阿川弘之氏は、大浜氏を少年時代の綽名の「貧乏(神)」と呼び、また「悲命の皇子」とも呼んでいる。そして、この「悲命の皇子」のただ 1 つの著作であるこの遺作について、「『万葉幻視考』を読む」というエッセーに、次のように書いている。

くしかし今にして思へば、未完に終わったため、却ってテーマにふさはしい暗示的な余韻を作中に漂ひ残してあるやうにも見える。少々薄ぎたない皇子さまだったが、これは万葉研究に生涯を捧げて斃れた「非命の皇子」大浜巖比古自身の「鎮魂の書」でもある。貧乏神の中に私は鶴の志を見る思ひがする。今後万葉集に取り組む学者は、肯定的に扱ふにせよ否定的に扱ふにせよ、大浜の所論を無視するわけにはいかないであらう>。そして、<これを読んで私は、大浜が不世出の異才だったことを改めて認識した。50 代での早逝はまことに惜まれる>と悼んでいる。

今回、『万葉幻思考』を読み終わって、この作品は、万葉集の研究者や愛読者、そして、まだ未読の読者たちへ、大浜巖比古氏が投げかけた問いであり、挑戦状ではないかと思う。阿川氏が言う通り、「未完に終わったため、却ってテーマにふさはしい暗示的な余韻を作中に漂ひ残してある」のである。その大浜氏が暗示したテーマは今だ「漂ひ残ったまま」で、研究者、そして、読者それぞれが、自ら考え、自ら幻視し、自ら空白を埋めていくという課題が残された、ということだろう。それにあたっては、何より未完の原稿を 1 冊の書に仕上げため尽力した坂本氏、阿川氏、梅原氏、そして、集英社の T・K 氏に敬意を表するとともに感謝したい。この書がなければ、大浜氏の問いかけは虚空に消えていたことになっただろう。

各氏が口をそろえて言う通り、大浜氏は、詩人的感性で万葉歌を読み解き、万葉集物語を語ってくれた。今回、万葉にも詩にも疎い私が、『万葉幻視考』に強く惹きつけられたのは、先に書いたように、まさにその詩

人的感性が、プロデューサーとしての私の感性を刺激しインスパイアしてくれたからだ。

大浜氏の「万葉幻視」に及ぶべくもないが、私自身も、「万葉幻想（ファンタジア）」、或いは、「万葉幻影」などと名付けて、「万葉集物語」を語り、舞台化してきた。言うまでもないが、大浜先生に直接指導を受けたこともなければ、これまで大浜万葉を学んだこともなかったけれど、先生と同じく歌人でもある「遺弟坂本氏」の不肖の弟子として、この歌心も詩心もない「孫弟子」を、大浜一門の末席に加えていただきたいと、愚考する、『万葉幻視考』考である。

最後に、詩人大浜巖比古氏が親友の阿川氏に提供し、小説『雲の墓標』の末尾を飾った、亡き戦友に捧げた詩「展墓」の一部をここに掲げよう。

海よ
海原よ
なんじ
汝の墓よ
ああ湧き立ち破れる青雲の下
われに向いてうねり来る蒼茫たる潮流よ

かの日
なれ
汝を呑みし修羅の時よ
しず たいらぎ
いま寂かなる平安の裡
なれ
汝をいづく千重の浪々
きらめく雲のいしづみよ

嗚呼、そのいしづみ
そのいしづみはよみがえる
かなしき日々はへなりたる哉
よきこと また崇きこと（略）

すべもなく な 汝が名は呼びつ 海に向いて

次回は、前述したように、私なりの万葉ファンタジア「万世集から万葉集へ」（その 1）を予定。そして、次々回は、旧広高時代の親友だった阿川、大浜両氏が、万葉集を師事した恩師で万葉学者の中島光風先生を取り上げる。中島先生は、私自身のもう 1 つのテーマであるヒロシマに、私を導くことになるが、さらに、その次の回では、また 1 人、ヒロシマで思いがけない方に再会する、という、人の縁の不思議さに思いが至る。次回タイトルは、「ヒロシマの光と風」を予定している。

